原著

ピアノ教授法における音符を言葉にする試み
－演奏技術向上への一可能性－

戸川　晃子[1)]

An Attempt at Verbalizing Notes in Piano Teaching Method
－ A Possibility for Improving Piano Performance Technique －

Akiko TOGAWA[1)]

要　　旨

先行研究では、ピアノの練習において、楽譜からイメージし、物語をつけることが、学習意欲や音楽表現意欲の向上に有効であることが示されている。これを踏まえ、本稿は、効率的かつ効果的なピアノ教授法を模索する上での一助として、音符を言語化することが、ピアノ演奏技術向上に有効である可能性を示唆したものである。

キーワード：ピアノ演奏技術、イメージ、ピアノ教授法、言語化

SUMMARY

Previous studies have proved that taking images from musical scores and creating stories based on them helps improve motivation for learning the piano and musical representation. In this study, we recommend verbalizing each note to improve performance technique.

Key words : Piano Performance Technique, “Image”, Piano Teaching Method, Verbalizing

1）教育学部こども教育学科

はじめに

「新しいピアノ楽曲に取り組む際、どのような手順で練習を進めますか？」という問いに対し、「模範演奏をまず聴く」「とりあえず初見で弾く」「楽譜をまず読む」など様々な答えがあろう。この問いに関連する先行研究では、楽譜から音楽をイメージし、言語化することが、音楽表現意欲を高められるとされている。とは言え、ピアノ学習者が楽譜を読むだけで音楽をイメージできるとは限らない。そこで、模範演奏を聴かなくとも、音符を言語化することの、ピアノ演奏技術向上に対する効果の可能性を探ってみよう。

第１章　ピアノを弾かない時間の重要性

まず「譜読み」と呼ばれる練習過程について考えたい。

Barry・Hallam は、音楽家の効果的な練習に関する先行研究のレビューを踏まえ、実証的研究を行った結果、「練習は、熟慮して計画的 (deliberate) に、意識 (mindful) しながら行ったとき、非常に効果的なものとなる」[1] と述べ、練習計画と意識の重要性を示している。また井上は、「よい演奏とは、全体のプランというのが必要」であり、「弾かない時間、楽譜を読む時間を作ることが大切」であるとし、全体のイメージを考え、それを音にし、その音をイメージに近づけていくことを薦め、楽譜を読む時間の大切さを述べている[2]。また、ピアニストであり教育者でもある Devoyon も、「音を出す前にまず土台を作り、目標を定め、理想とする音楽を具体化しなければならない」と述べ、譜読み段階で、何も意識せず音だけを弾いてしまうと目標がミスタッチをしないことに限定されていき、自身の想像力を殺してしまうと続けている[3]。

問題は、この譜読みの段階で作るべき「土台」とは何かということである。

Devoyon は「それぞれの音が必要に応じて適切な位置を占め、またしかるべきキャラクター、強弱、そして適した音質で、さらには作品の構成の中でそれぞれ欠かすことができない音として存在し、そのすべての音によってひとつの世界を作り上げよう、と考える」[4] という。つまり練習の過程は「この理想に到達しようと努めること」[5] を目的としており、譜読みの段階は、その見通しを事前に立てる重要な時間であると考える。

ただし、その練習のアプローチは、初心者と上級者とでは異なるだろう。倉片は、Gruson の研究結果を挙げ、「初心者は１音ずつ音を拾っていくボトムアップ的アプローチで、上級者になるほどまず曲全体をみて、しだいにその中の構造をつかんでいくトップダウン的アプローチで楽譜を読んでいる」[6] と推測する。しかしながら、初心者と上級者で練習のアプローチが違えども、曲全体または曲の部分について、「土台」として、ひとつの世界をイメージすることが、練習の効果を高めるうえで重要であることには変わりない。

第２章　イメージすることの重要性

ではその譜読みの過程で何を作り上げるべきかをより具体的に考えていきたい。その問題の一つが、すでに井上が述べている「イメージすること」である。

本研究者は、ピアニストとしての経験から、ピアノの練習過程において、音楽をイメージすることは当然必要なことであると考えている。例えば新しい曲に取り組む際、その曲の解釈を深めるためには、作曲家の背景、形式を文献等で調べ、楽譜を読み、イメージを膨らませるものである。同じ曲を同じ条件のもとで演奏したとしても、演奏者が違うと、聴き手は「何か違う」と感じることがある。それは、演奏者が抱くイメージが異なるからであろう。

しかし一口に「イメージ」といっても、その具体的姿についてはいまだ不明である。さらには、譜読みの段階で「イメージをしましょう」と言ったところで、その言葉が初心者に対して効果的に働くとは思われない。イメージの重要性を譜読みの過程に効

果的に組み入れるには、それ相応の工夫を要されるのである。

まずイメージの具体的姿を考えていきたい。これについては以下の先行研究がある。野村は、「ファンタジー」という概念をとりあげ、その源には、音楽の「言葉」や「色彩感」があるとした上で、「ファンタジーをもつことは、言葉を変えれば、イメージをつくること」とし、「ファンタジーあるいはイメージの根底には、常にそれを生み出すにふさわしい根拠や、理由があることを忘れてはならない」と述べている[7)]。野村はこのようにイメージの根底にそれにふさわしい根拠の必要性を指摘する一方で、曲全体を通した一つの物語を想定しようとすることには無理があると感じており、ほんの数小節のなかにイメージを作ることは可能ではないかと考えている[8)]。また、調性は作品の基本的意味をなすものであり、意識することで、曲の表現に役立つ[9)]とも述べている。つまり野村の考えによれば、イメージとは、恣意的に作られるものではなく、楽譜がもつ情報を根拠に探求されるべきものなのである。

ではこうした根拠のあるイメージを効果的に作り上げるにはどうすればよいだろうか。

武本はイメージを用いた実践方法として「イメージ奏法」[10)]を提案している。これは、「作品を楽曲分析した後、言葉・物語・表現曲線・色などによる『演奏設計図』をつくり、それに基づいたタッチや奏法を用いて、イメージどおりの演奏をめざす演奏・学習法」[11)]である。その過程は、①楽譜から作曲家の意図をくみとり、②演奏したいイメージを明確にし、③具体的な奏法を見つけ、「演奏設計図」を完成させるというものである。「イメージ奏法」においても、楽譜を読み、まずイメージを明確にすることから始め、この「演奏設計図」を完成させ、イメージどおりの演奏をめざして練習をすることで、効率よく、かつ、意欲的に取り組めるとしている。

このように、ピアノの練習過程において、ピアノを弾かずに、楽譜を読み、確かな要素を用いてイメージすることの大切さは、先行研究において十分指摘されるところである。ところで武本はイメージ奏法における②の過程において、イメージを言語化し物語をつくること、つまり音楽を言語化することを求めている。音楽と言語との関わりについてのこの指摘は大変興味深いところであり、ピアノ演奏技巧向上に対する効果の可能性を探るうえで示唆を与え得るものと考える。そこで次章では、このことをヒントに「音楽とイメージ」から一歩進めて音楽と言語との関わりについてみてみよう。

第３章　音楽と言語の関わり
－音楽を言語化することの有効性―

音楽と言語の関わりについては、次のような先行研究がある。Ball は、カデンツが言語における「構文」に似ているとし、Ｉ－Ｖ－Ｉの和音の流れには、始まり、展開、終わりという物語を感じると述べている[12)]。さらに、バルトークやヤナーチェクも「話し言葉のイントネーションやリズムが、音楽における感情表現に有効であると考えていた」[13)]と続けている。興味深いことに、「言語の場合も、音楽の場合も、リズムに関する情報の処理は、脳の同じ部位で行われている可能性がある」[14)]という。Patel らの研究でもまた、リズムの面でも、メロディの面でも、言語はその民族の音楽に影響を与えているということがわかっている[15)16)]と述べられている。Mithen は、「音楽にも言語にも、感情を豊かに表現するフレージングの性質がある」とし、韻律は、「話しことばのメロディとリズムを意味する」とし、また「音楽は感情を表現し、聴き手に感情をおこさせる働きがきわめて大きい」とも述べている[17)]。

これらの先行研究から、音楽と言語は、本来分離させて捉えられるべきものではなく、根っこの部分（文化、民族性）でのつながりに常に注意が必要だということが示唆される。したがって、音楽もまた、私たちが話す言語による表現と同じように、楽譜に書かれるリズムやメロディによって感情表現がなされ、それがその表現の豊かさにつながるのではないかと考える。確かに、本研究者がドイツ留学中、ドイツ音楽を勉強するには、まずドイツ語を勉強すべきだと言われたことがある。そして、レッスンでは、

すべての音符に意味があり、話しているつもりで弾くべきだという指導を受けたものである。これは、人に伝えること・表現するということは、メッセージ・言葉を伝えることと同義であると認識されているからだと考えられる。

音楽のイメージに対する言語の有効性については、例えば曲に曲名がついているというだけでも、聴衆も演奏者も一定のイメージを持つことができる。Saint-Saëns 作曲の「動物の謝肉祭」は14曲からなる組曲で、各曲に題名がつけられており、動物の描写を容易に想像することができよう。曲名は、作曲前に標題がつけられる場合と作曲後に標題がつけられる場合とがあるが、音の並びだけではなく、その音楽を言語化したもの（曲名など）があれば、人は音楽をより容易にイメージすることができる。

第４章　実践

第１節　ピアノ教授法におけるイメージ描画学習の有効性

本章ではターゲットをより限定して、その曲のイメージやリズムのイメージの重要性を譜読みの過程に組み入れる方法を考えたい。

先行研究の多くは主にピアノ学習者や音楽家を対象として教育方法や練習方法を論じてきた。では対象を保育者・教員養成校におけるピアノ学習者に定めるとすると、有効なピアノ教授法はどのようなものがあるだろうか。彼らは、保育・教育のひとつの技能としてピアノ演奏技術が求められている。しかし、入学生の約４割がピアノ未経験者である[18]という現状がある。

西濱は[19]、武本が提案するイメージ奏法を保育者養成校の学生が取り組みやすいように改善し、それを実践した。その結果、「イメージ画を描いたら表現し易くなった」という学生からの感想などから、イメージ画とその場面の物語を考えることで、学生の表現意欲を向上させることができたとその成果を述べている。

加藤・伊達は[20]、保育者養成校の学生の音楽表現力を高める方法として、イメージ描画学習を試みた結果を報告している。一つの方法は、他者の演奏を聴取し、自分の印象をイメージ画にすること、もう一つは、自分の学習曲に対するイメージを場面ごとに考えさせるという方法であった。結果、音楽への意識の向上、「伝えたい意欲」の喚起、練習目的の具体化・明確化などに有効であると述べている。

そこで、本研究者は、2015年７月、保育者・教員養成校において、入学後に授業で初めてピアノを経験した初学者及び入学前からの経験者を含めた10名が、課題曲に物語をつけた後、演奏や意識がどのように変化したか調べた。なお、この10名は、１年間のピアノ実技を中心とした音楽の授業を修得済みの２年次生である。

方法として、各進度に応じた教則本の課題曲に取り組み、だいたいの音の流れや響きを把握できた後、その曲に合った自分のイメージする物語をつけること、すなわち音楽を言語化することを指示した[21]。

この実験的実践を行った後、意識の変化を問うため、「言語化したことで、弾き易くなったか」という質問をしたところ、10名全員から「はい」との回答を得た。また、意欲の変化を問うため、「イメージ通りに楽曲を表現したいか」という質問をしたところ、同じく10名全員から「はい」との回答を得た。

また演奏の変化について調べるため、物語を書きこんでいない楽譜を用いてまず演奏し、その後、物語を意識して演奏する条件を統一させるため、自分の考えた物語を他者に説明した後、その物語を書き込んである楽譜を用いての演奏を行った。このふたつの演奏を他の学生が聴き比べた際、「全然違う」という声があがり、「友達の演奏が変わって驚いた」と感想でも述べている。

なお、このような変化を感じる声は、初学者よりも経験者の方が多かった。初学者は、技術的に難しく、何回も弾き直す等するため、聴き手に音楽表現向上を感じさせることは難しい[22]。つまり、実際の演奏の評価から見れば、初学者よりも経験者の方に効果的であったと言える。とはいえ、イメージを言語化することで、イメージが明確になり、弾き易

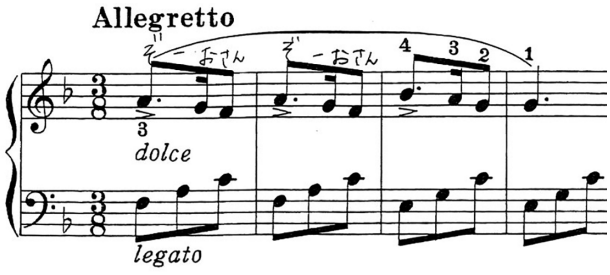
くなったと感じ、さらにイメージ通りに弾きたいという音楽表現に関する意欲向上には、ピアノ学習者に有効であると言えよう。

しかし、楽譜を見て、自分が理解しているリズムや音が正しいか否か等を認識しにくい初学者においては、楽しさや弾き易さを感じたからと言って、実際に弾けるようになるとは言い難い。また、イメージを明確にすることで、例えば、連続する音がある程度均一に音価通りに弾けるようになるのだろうか。表現したいものが正しく伝わるためには、練習を重ね、技術を習得することが大切である。

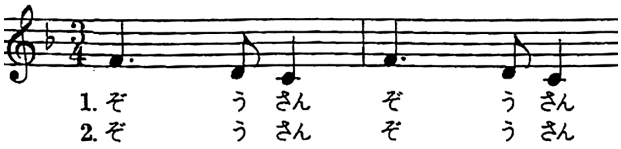
では、初学者が一音ずつ楽譜を読むことに着目し、音符を言語化することで、技術を効率的に習得できないだろうか。

第２節　音符を言語化することによる技術改善の有効性

Orff の音楽教育では、ことばをリズム化することで生きたリズムを学ばせている[23)]。この「ことばとリズム」の関係を逆転させる試み、すなわち、音楽を言語化することを取り入れ、個々の音符それぞれを言語化すれば、技術的な改善に有効ではないだろうか。つまり、正しいリズムが弾けない、同一音価が不揃いになる等、技術的な問題を効率的かつ効果的に解決することに焦点をあて、ある音型を言語化したものをシステムとして把握し、異なる曲においてもその音型を目にした際、即座に適応できるというものである。



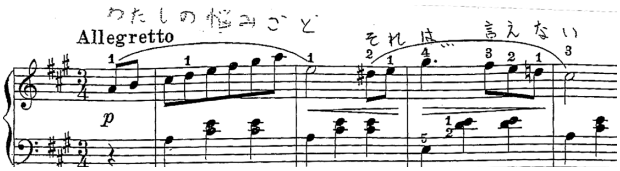
例１[24)]



譜例１[25)]

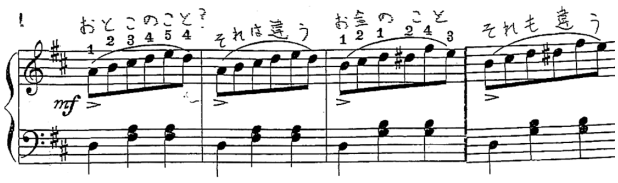
例１は、バイエル教則本104番であるが、「音符に言語をつける」ことを課題として提示した際、右手のリズムに「ぞーおさん」と学生が言語化した例である。童謡の「ぞうさん」（譜例１）からイメージしたものであろう。言語化する前の演奏は、アクセントがあまり聴き取れなかったが、「ぞーおさん」と発音しながら弾くと、アクセントを伴い、表情が出るようになっているという他の学生からの評価があった。演奏した学生も、「ピアノを弾くのが楽しくなった」と感想を述べている。

さらに、このリズムをなかなか正しく演奏できなかった別の学生に、本研究者が、口頭で音符それぞれの音価について理論的に説明した結果、理解は示したものの、実際の演奏では改善は見られなかったが、この例１を挙げ「ぞーおさん」と歌いながら弾くように指示したところ、すぐに正しいリズムに改善された。



例２[26)]

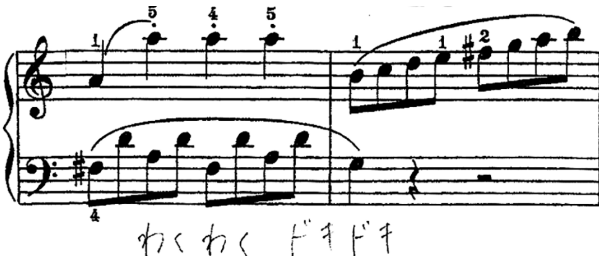
例２は、バイエル81番の冒頭である。ある学生は「わたしのなやみごと　それは言えない」という歌詞をつけた。ここで、この曲の特徴を見ておこう。Allegretto（やや早く）、イ長調、四分の三拍子であり、左手には「leggiero（軽やかに）」という指示がある。これらの情報から、曲のイメージを問われれば、楽しい曲であると考えられる。しかし、学生が考えた言語から楽しさを感じられるとは言い切れないだろう。では、技術面に着目した際、言語化したことにより、どのような変化があったのか。言語化する前の演奏では、右手の八分音符の連続において、均等に演奏されておらず、弾きにくい印象を受けた。言語化した後の演奏では、なめらかになり、音価はほぼ均等になっていた。質問紙においても、言語化はやや難しいが、言語化したことで弾き易くなったと答えている。また、イメージ通り楽曲を表現したいという意欲も確認された。



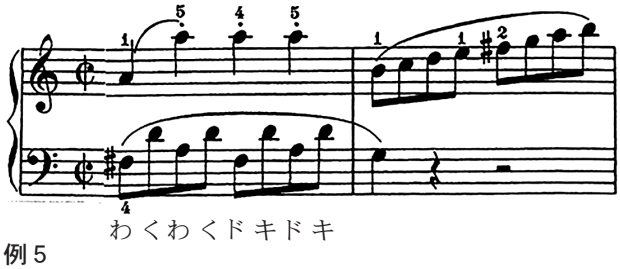
例３[27)]

続いて、二長調に転調された部分（例３）においては、「おとこのこと　それはちがう　おかねのこと　それもちがう」と言語化していた。この言語化により、複数人の登場人物がいることがわかり、学生が、スラーの意味を理解していること、弾き分けたいと考えていることが認識できた。また、この箇所は、なかなかスムーズに弾くことができず、台詞を特にアクセントの箇所を意識して音読した後の演奏では、それが反映されていたものの、弾き直す回数は、言語化する前と比較しても減らず、演奏からは弾き易くなったとは聴き取り難かった。感想では、「言語化するために何度も同じ場所を弾いてボソボソ言いながら考えて大変だったけど楽しかった」と述べられている。他の学生も「この曲を聴くたびにこの歌詞を思い出して笑ってしまう」と印象に残るものであった。

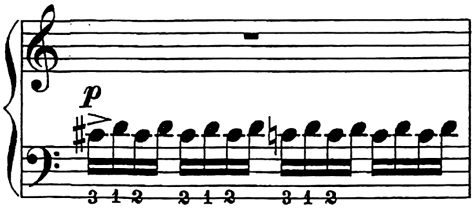
例４は、ソナチネ第７番の９小節目である。曲全体のイメージを言語化し、物語を付けてきた学生の例である。物語の前半は、「天気がよいから　でかけよう　少しそわそわしている気分　わくわくドキドキ　新しい発見がありそうな予感　」というものであった。演奏では、例４における左手がぎくしゃくし、生き生きと弾けておらず、本研究者が、演奏者に、例５のように左手だけで「わくわくドキドキ」を発音しながら、それがスムーズに発音できるまで弾くよう指示をした。その結果、演奏も生き生きと音価通りに弾くことができたことを演奏者が確認し、「音の強弱だけでなく、スピード感も変わった」と述べている。これを音名で発音しながらではどうであったか。スピード感を味わうことはできず、歯切れが悪い演奏であったことは、演奏者も本研究者も認識した。これは、表現の面で、音名での発音と比較し、「わくわくドキドキ」と発音した場合は、感情が生まれ、技術面では、スピード感のある打鍵に改善されたということであろう。



例４[28)]



例５



例６[29)]

例６は、モーツァルト作曲ソナタ第１楽章13小節目である。ｐ（弱く）で、十六分音符の音価と強さを均等に演奏するのは難しい。一般的には、ピアノ学習者は、各指の運動の均一性を習得するために、このような箇所を取り出し、部分練習と称して、付点リズム等様々なリズムを使って脱力しながら弾けるように、練習を重ねるであろう。しかし、保育者・教員養成校の学生においては、短期間で技術を習得することが求められている。そこで、「バナナが食べたい」を大きな声で発音するところから徐々に小さい声にしていき、それに合わせて演奏することを提案した。すると、不均等に弾いていた十六分音符の連続をひそひそと話すように均等に弾けることができた。

例１から例６で示したように、技術的な問題がある箇所について、ストーリー性は重視せずとも、音符ひとつひとつを言語化することで、技術改善がみられたと考えられる。特に初学者よりも経験者にお

いては、技術が早く改善され、音楽表現向上に結び付くと言えよう。

また、授業時に正しいリズムを理解しても、１週間後の授業時には、それ以前の間違ったリズムに戻っていることがないだろうか。しかし、言語を発しながら弾けば、正しいリズムが何かということを理解でき、記憶に残り、授業以外でもそこに立ち戻ることで、自分自身で正しいか否かを確かめることができるのである。

まとめ

効率的かつ効果的な練習とは、目標を掲げ、それに近づけていくことである。ピアノ学習者において、例えば、あるリズム形態を見れば、それに合う言語が浮かび、正しいリズムを認識できるならば、それは、効率的な練習方法のひとつになるであろう。

本研究では、言葉を音符に乗せることで、技術面の向上を目指せるのではないかと提言した。イメージを明確にするために言語化することは、効果があると言えよう。どんなストーリーを考えるかは演奏者の自由である。ただ、音楽を言語化することで、表現できなかったことが表現できるようになるならば、それもまた、効果的な練習方法を提示できるピアノ教授法と言えるのではないだろうか。

※本研究は、科学研究費（科研費研究課題番号26870763）の助成を受けたものである。

注釈

１）ナンシー・Ｈ・バリー、スーザン・ハラム，第10章練習，演奏を支える心と科学，リチャード・パーンカット，ゲーリー・Ｅ・マクファーソン，「訳」吉野巌、権藤敦子，誠信書房，2011，249

２）井上直幸，楽譜を読む，ピアノ奏法，春秋社，2003，20

３）パスカル・ドヴァイヨン，練習，ピアノと仲良くなれるテクニック講座，「訳」村田理夏子，音楽之友社，2011，24

４）前掲書，25

５）前掲書，25

６）倉片憲治，音楽心理学の方法，音は心の中で音楽になる音楽心理学への招待，谷口高士，北大路書房，2000，３

７）野村三郎，「音楽的」なピアノ演奏のヒント，音楽之友社，2012，10-11

８）前掲書，11

９）前掲書，46

10）武本京子，ピアノを学ぶ人に贈る武本京子の「イメージ奏法」解説書，音楽之友社，2013，39

11）前掲書，６

12）フィリップ・ボール，音楽の科学―音楽の何に魅せられるの？，「訳」夏目大，河出書房新社，2013，533

13）前掲書，538

14）前掲書，540-541

15）前掲書，543

16）Aniruddh D.Patel, MUSIC, LANGUAGE, and the BRAIN, Oxford University press, 2008, 513

17）スティーヴン・ミズン，歌うネアンデルタール，「訳」熊谷淳子，早川書房，2012，41-42

18）戸川晃子，教員養成校における＜音楽＞授業の試み，神戸常盤大学緑葉第10号，2015，８

19）西濱由有，保育者養成校のピアノ演奏指導における「楽曲イメージ奏法」の効果に関する研究，東邦学誌，2012，第41巻，第１号，89-107

20）加藤晴子・伊達優子，自ら試行するピアノ表現学習における学生の意識の変容―イメージ描画からのアプローチを例に―，岐阜聖徳学園大学紀要，教育学部編，2009，99-111

21）本研究の趣旨にしたがい、彼らのイメージを制限することを避けるため、模範演奏は行わなかった。しかし、初学者を含めた彼らにとって、楽譜からピアノを弾かずに音をイメージすることは非常に難しいと考え、先に述べた「音を出す前にイメージし」という練習の始めの過程は取り入れず、音をなぞるなど一定の練習を行った

後に曲に物語をつけることを行った。

22）戸川晃子（2015）『「ピアノを用いない練習」による演奏表現向上に関する研究』の pp41を参照されたい。

23）宮崎幸次，オルフの音楽教育～楽しみはアンサンブルから～，レッスンの友社，2005，51

24）バイエル，バイエルピアノ教則本，音楽之友社，73

25）こどもの歌200，小林美実，チャイルド本社，2008，145

26）24）同書，56

27）前掲書，56

28）M.Clementi,Sonatine Op36-No1，新訂ソナチネアルバム，音楽之友社，37

29）前掲書，W.A.Mozart,Sonate,75